

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）  
拠点病院集中型から地域連携を重視したHIV診療体制の構築を目標にした研究  
分担研究報告書

研究分担課題

HIV 感染症患者の地域連携の推進と地域の看護の役割  
拠点病院から地域への橋渡しを促すための意見交換会

分担研究者 鈴木 明子 城西国際大学看護学部 教授  
研究協力者 神明 朱美 城西国際大学 看護学部 助教  
研究協力者 松尾 尚美 城西国際大学 看護学部 助教  
研究協力者 丸山 あかね 城西国際大学 看護学部 助手  
研究協力者 小川 ひろ子 城西国際大学 看護学部 非常勤実習助手

**研究要旨：** 千葉県の子 HIV 感染症患者の状況を伝えることで、地域の施設で HIV 感染症患者の受け入れを促すことを目的として、2 回の意見交換会を開催した。9 月に千葉市で開催した意見交換会には、案内を出した 853 施設中 36 施設 49 名が参加し、2 月に柏市で開催した意見交換会には、案内を出した 744 施設中 15 施設 20 名が参加した。千葉県の最近の HIV の動向、HIV 感染症患者の現状、地域との連携で感じる困難、当事者からのメッセージ、意見交換によって、参加者は HIV に関する最新情報を得て、HIV への不安が減り、HIV は怖くないという思いを持ってもらうことができた。地域との連携を進めるためには、拠点病院と連携しながら、とくに介護職員の意識を変えることが必要だという意見が多く、研修の必要性も挙げられた。

A. 研究目的

HIV 感染症患者の地域連携を推進する上での、地域の看護職の役割を明らかにする。また、HIV 感染症患者の地域連携を推進するため、意見交換会を実施し、効果的な啓発活動の在り方を検討する。

B. 研究方法

HIV 感染症患者の地域での受け入れ推進を目指して、医療・福祉・行政の関係者を対象に意見交換会を行った。開催は土曜日の午後実施し、内容は、HIV の最近の動向、拠点病院の看護の視点、地域包括ケアの視点、当事者からのメッセージのあと、参加者間で意見交換を行った。参加者にはアンケートを依頼し、興味・関心の内容、それに対する満足度、参加による HIV に対する認識の変化の有無やその内容について検討した。

1) 千葉市における意見交換会

開催場所は、県庁所在地であり県内のどこからでも集まりやすい千葉市とした。

対象職種は、訪問看護師とケアマネジャーとして、厚生労働省事業所検索より、千葉市の訪問看護ステーション 77 施設、居宅介護支援事業所 323 施設と、千葉市近隣 9 市町村の訪問看護ステーション 78 施設、居宅介護支援事業所 349 施設を拾い出し、合計 827 施設を対象施設とした。また、千葉県内健康福祉センター（保健所）17 施設、千葉県内の HIV 診療拠点病院 9 施設にも開催案内文とチラシを郵送し、参加者を募った。

意見交換会  
HIV陽性者の在宅療養を  
地域で支えていくために

HIV陽性者が地域で共に生きることが当たり前となってくる今、  
私たちは何ができてでしょうか？  
共に考えていきましょう

【当日スケジュール】  
<13:00~14:00>  
1. 会の趣旨説明およびHIVの最近の動向（千葉大学医学部附属病院 医師 猪狩 英俊）  
2. HIV陽性者の現状（千葉大学医学部附属病院 看護師 古谷 佳苗）  
3. 地域との連携で感じる困難（千葉大学医学部附属病院リハビリ科 葛田 衣重）  
<14:00~15:00>  
4. 当事者からのメッセージ（JANP+ 長谷川 博史）  
<15:20~16:30>  
5. 意見交換会  
6. 今後のスケジュール

裏面が参加申し込み  
FAX用紙と  
なっております

2019年9月7日(土)  
13:00~16:30  
ペリエホール 7階 Room C  
(JR千葉駅東口直結)  
先着40名様 参加費無料

申し込み・お問い合わせ：千葉大学医学部附属病院 感染制御部  
TEL：043-222-7171（内線6445） FAX：043-226-2663  
主催：厚生労働科学厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）主任研究者：猪狩英俊 猪狩研

2) 柏市における意見交換会

開催場所は、柏市とした。研究代表者の猪狩が報告しているように、柏市は HIV 感染症患者数が県内でも多い市町村のひとつであり、都内に通院している患者も多く、その場合はいずれ高齢化に伴い受診困難な状況になると予想され、地域の医療機関での HIV 診療体制構築や地域での受け入れ体制の強化が

必要な地域である。

対象職種は、1)と同様に訪問看護師とケアマネジャーとし、厚生労働省事業所検索より、柏市とその近隣の松戸市、我孫子市、野田市、市川市、鎌ヶ谷市、印西市、白井市の訪問看護ステーション 143 施設と居宅介護支援事業所 575 施設、合わせて 718 施設を対象施設とした。また、千葉県内健康福祉センター（保健所）17 施設、千葉県内の HIV 診療拠点病院 9 施設にも開催案内文とチラシを郵送し、参加者を募った。

HIV陽性者が地域で共に生きることが  
当たり前となってくる。今、  
私たちは何ができるでしょうか？  
共に考えていきましょう。

《意見交換会》  
**HIV陽性者の在宅療養を  
地域で支えていくために**

2020年2月22日(土) 13:00~16:30  
貸会議室スカイルーム柏 大会議室  
(JR 柏駅東口徒歩3分/柏市柏 2-5-8 柏セントラルビル6階)  
**先着50名様 参加費無料**

申し込み・お問い合わせ：千葉大学医学部附属病院 感染制御部  
TEL：043-222-7171 (内線 6445) FAX：043-226-2663

内容

1. 千葉県内の HIV の最近の動向…医師の立場から
2. HIV 陽性者の現状…看護師の立場から
3. 地域との連携で感じる困難…ソーシャルワーカーの立場から
4. 当事者からのメッセージ…当事者の立場から
5. 意見交換会～自分たちの施設で受け入れるとしたら

表面が参加申し込み FAX 用紙となっております

主催：厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業主任研究者：猪狩英俊） 協賛：  
分担研究者：鈴木朋子 / 城西国際大学看護学部教授

どちらの意見交換会も、昨年度の内容を踏まえ、医師、看護師、ソーシャルワーカーのそれぞれの立場から千葉県の動向や拠点病院の現状について講演し、HIV 感染者当事者の話として日本 HIV 陽性者ネットワークジャンププラス：JaNP+ と、社会福祉法人はばたき福祉事業団に講師派遣を依頼した。

### 3) A 市における交流会でのプログラム

1)の参加者から依頼があり、A 市の福祉施設・行政・医療機関の有志が集まる交流会で、「もう、エイズなんて怖くない！」をテーマにして千葉県の HIV の最近の動向についての講義と、参加者による意見交換会を行い、46 名が参加した。

## C. 研究結果

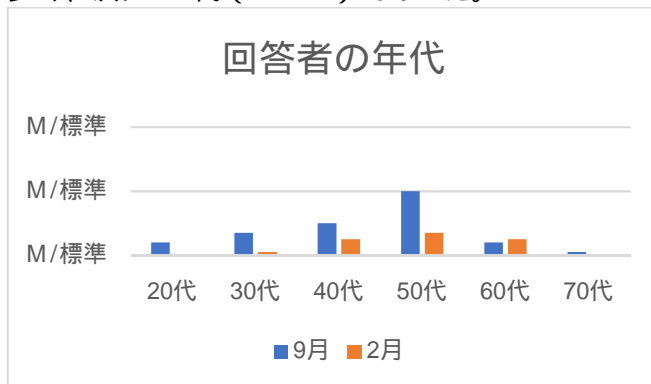
9 月開催の意見交換会には、案内を通知した 853 施設のうち、36 施設の 49 名が参加した（案内した

施設の 4.2%）。また、参加者には昨年度同様のアンケートを依頼し、48 名から回答を得た（回収率：98.0%）。

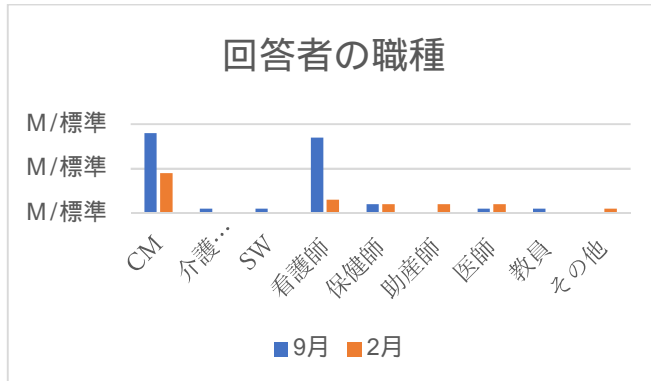
2 月開催の意見交換会は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行と、参加申し込み者からキャンセルの申し出もあり、開催の是非について苦慮した。武漢からの帰国者や感染者、医療従事者を取り巻く差別や排除の風潮は、HIV を取り巻く状況と重なるように見えたため、感染と差別・偏見を考える上では逆に好機と捉え、開催することとした。ただし感染防止に努める会場設営を行い、意見交換会という形でのグループディスカッションを行わず、1 対 1 の質疑応答という形に変更し、時間も短縮して開催した。案内を通知した 744 施設のうち、15 施設 20 名が参加した（案内した施設の 2.0%）。また、参加者に同様のアンケートを依頼し、18 名から回答を得た（回収率 90.0%）。

A 市における研修会でもアンケートを実施したが、これは前述したアンケートとは異なる内容のため、9 月と 2 月の 2 回の意見交換会で回収したアンケート合わせて 66 名分の回答について解析する。

回答者の年代は、50 代が 27 名（42.2%）と最も多く、次に 40 代（23.4%）であった。



回答者の職種は、介護支援専門員が最も多く 27 名（45%）、次に看護師 20 名（33%）、ほかに保健師、医師、助産師、介護職員、ソーシャルワーカー、教員、その他であった。

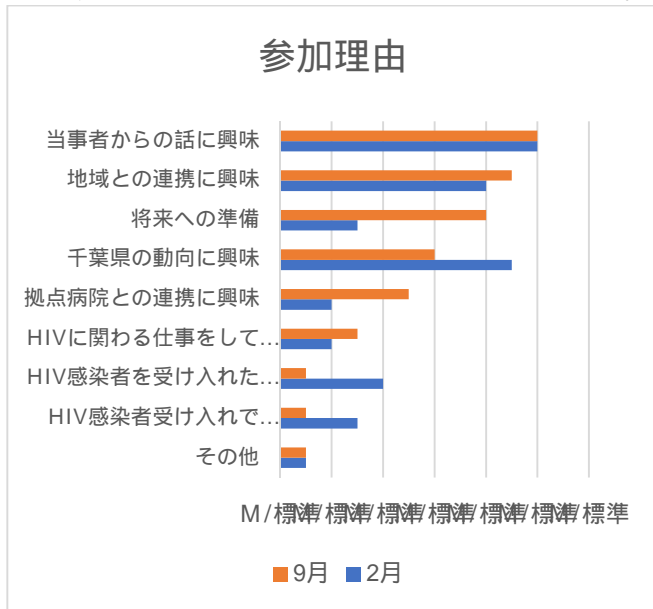


職責についての経験年数は、 $14.8 \pm 10.5$  年、現在の勤務先の経験年数は  $7.6 \pm 6.3$  年であった。

これまでの HIV 研修会に参加の有無は、参加した

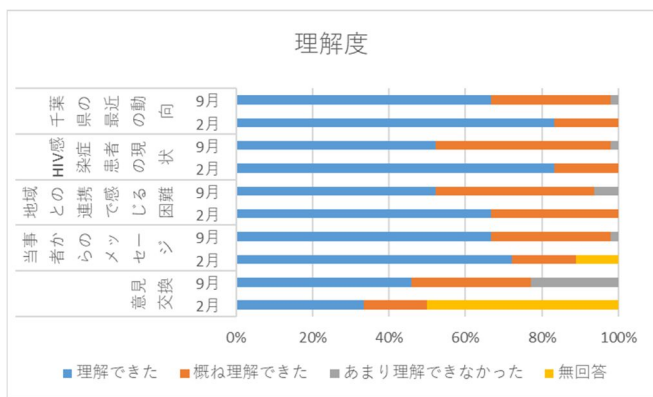
ことがある 29 名 (44.6%)、ない 36 名 (55.4%) であった。HIV 感染症患者の話をしたことがある 24 名 (36.9%)、以前に聞いたことがあるが詳しい話ではない 7 名 (10.8%)、ほとんどない 34 名 (52.3%) であった。

参加理由は、複数回答で、当事者からの話に興味があるが最も多く 20 名、地域との連携に興味がある 17 名、千葉県の動向に興味がある 15 名であった。

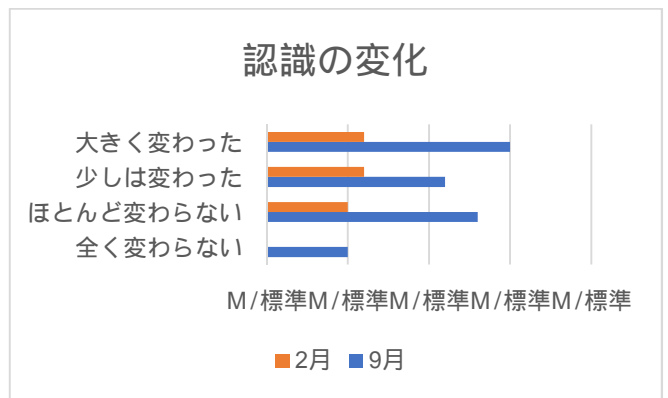


理解度は、千葉県の最近の動向、HIV 感染症患者の現状、地域との連携で感じる困難、当事者からのメッセージは「理解できた」と「概ね理解できた」がほとんどであった。9 月と 2 月では参加人数が異なるため一概に比較はできないが、講師が同じでも異なっても、大きな差はなかった。

2 月の意見交換は、グループワークを行わず単なる質疑応答であったため、無回答が半数を占めた。



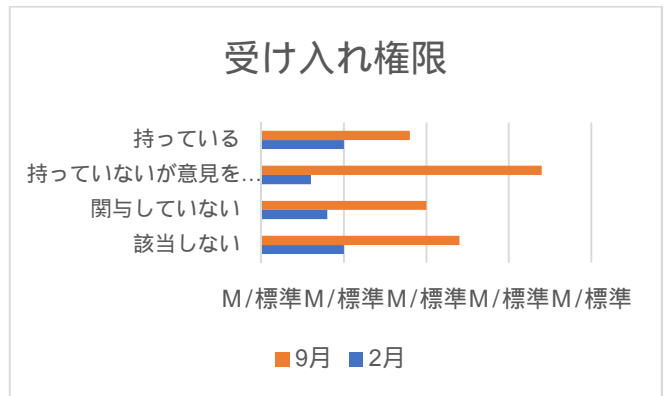
HIV に対する認識の変化は、全く変わらない 5 名 (8.2%)、ほとんど変わらない 18 名 (29.5%) に対して少しは変わった 17 名 (27.9%)、大きく変わった 21 名 (34.4%) であり、認識の変化があったと答えた者の方が多く 62.3% であった。変わらないと答えた者は、これまでに HIV 感染者を受け入れたことがある、過去に研修を受けたことがある者であった。



具体的な認識の変化に関しては下記のとおりであり、HIV に関する現在の状況、新しい知識、当事者への思いなどが挙げられた。

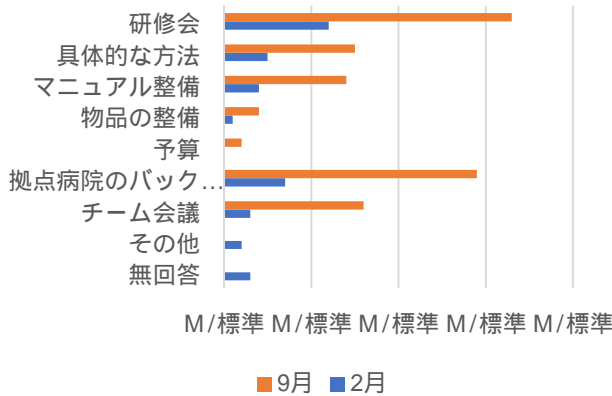
- ・U=U初めて知った
- ・感染力がこれ程弱いということも初めて知った
- ・HIVの知識が詳しくなかつたので、最近の情報や状況が知れてよかった
- ・治らない病気、数年で亡くなる病気だと勘違いしていた
- ・HIVは簡単にうつらない 怖がらなくてよい！！
- ・治療（内服）によってHIVが検出限界以下まで下がりその状態が維持できれば他者へ感染しないという事を知れた事
- ・不安が減った、HIV=怖いというイメージが変わりました
- ・血友病の方の苦しさ、考えた事なかった
- ・患者さん達は大変なおもいをしていること
- ・現場で働いている方の声も聞けて良かった
- ・血液で移ってしまう事はわかってはいたが、少しは安心してお世話ができる

自施設の HIV 感染者受け入れの権限は、持っている 14 名 (21.5%)、持っていないが会議で意見を言える 20 名 (30.8%)、関与していない 14 名 (21.5%)、該当しない 17 名 (26.2%) であった。



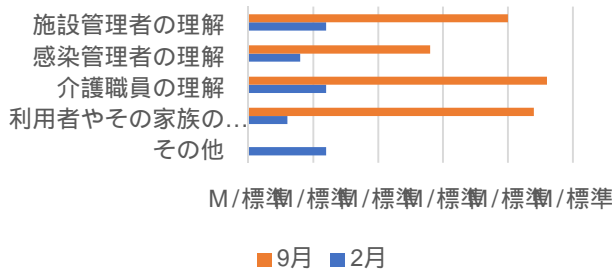
HIV 感染者患者を受け取るために必要なことは、複数回答で、施設職員への研修会 45 名 (30.0%)、拠点病院のバックアップ体制 36 名 (24.0%)、ケア等具体的な方法 20 名 (13.3%)、チーム会議など関わっている人たちが集まり定期的に行う情報交換の場 19 名 (12.7%)、マニュアル整備 18 名 (12.0%) の意見が多かった。

## 受け入れに必要なこと



今の地域において HIV 感染者の受け入れが進まない原因として、複数回答で、介護職員の理解が得られない 29 名 (27.9%)、施設の管理者の理解が得られない 26 名 (25.0%)、施設のほかの家族や患者の理解が得られない 25 名 (24.0%)、施設の感染管理担当者の理解が得られない 18 名 (17.3%) であった。

## 受け入れが進まない原因



グループでの意見交換では、HIV 感染症患者本人の意向、介護保険への移行に関する問題点、地域の情報不足などがあげられた。

- HIV感染者の方たちの老後についての移行があまりなく、現状に不安がなければいいという感じで、介護保険が必要になるところでどのように暮らしていきたいのかははっきりしていない
- 介護保険のサービスでどこまで適応できるのか不安がある
- 自立支援の障害者サービスから介護サービスに移行するとき、今まで使っていた施設が使えなくなる問題がある
- 偏見が物事をより困難にしていると感じた。当事者の話は、より考えるきっかけになった
- 全体的に病気のことを理解していなかったため、地域として考えるなら、知るべきだと思った
- 地域や近隣施設がどの程度HIVについて理解しているのか、受け入れているのかを把握できないため、連携がとれない



## D. 考察

9月に千葉市で開催した意見交換会には、案内を出した 853 施設中 36 施設 (4.2%) 49 名が参加し、2月に柏市で開催した意見交換会には、案内を出した 744 施設中 15 施設 (2.0%) 20 名が参加したことから、地域における HIV の関心の高さは、2~4%と考えられる。

参加理由で最も多かったのは「当事者の話を聴けるから」であり、HIV 感染者を理解するうえで当事者が抱える思いや辛さを知ることが、HIV 感染者の受け入れを進める上で有効な方法のひとつと思われる。一方で、意見交換会の参加者から依頼されて、A市の地域の交流会で HIV に関する講義と意見交換を行った時は、当事者の話がなくても参加者が集まった。この交流会は、地域包括支援システム構築に向けた関連事業所間の顔が見える関係づくり活動として有志により行われているものであり、地域連携の困難事例として感染症患者を捉えていたと思われる。HIV 感染症患者も地域住民の一員であるから、拠点病院と地域の介護支援専門員との関係を構築し、地域包括システムの中で HIV 感染症患者を拠点病院から地域へつなぐことで地域連携がスムーズにいく可能性がある。

また、地域のさまざまな職場や職種で研修会や勉強会が開催されていると思われるが、その中で HIV を取り上げていただき、最新の知識や現状を知ることが、HIV 感染症患者の受け入れにも有効であると考えられる。かつて報道されていた HIV やエイズのイメージから、情報が更新されていない医療・福祉従事者が多いことはアンケートから明らかであり、参加者は研修会が重要だと捉えていることから、保健所等行政機関あるいは拠点病院から最新の情報を発信することは重要である。受け入れには拠点病院のバックアップ体制も必要だと参加者は感じているため、地域との連携を考える上では拠点病院の役割も重要であると考えられる。

当事者の視点では、差別や偏見、プライバシーの漏洩、地域における専門医の不在、医療不信といっ

たことが地域医療を受ける場合の問題点として挙げられた。意見交換会の参加者が、受け入れが進まない理由として「利用者やその家族の理解が得られない」ことも挙げたが、サービスを利用するとき利用者の疾患名が他の利用者に明らかになることは、まさに当事者が危惧している「プライバシーの漏洩」にあたる。こういった利用者とサービス提供者間の意識の乖離にも気づけるように、今後の意見交換会では触れていく必要がある。

これまでの意見交換会では、地域の医療・福祉・行政の関係者が考える HIV 感染症患者の受け入れが進まない理由、受け入れに必要なことなど、率直な意見を聴いてきた。今後はこれを量での調査として千葉県内の施設を対象に行うことを計画する。また、地域連携が進むためには、どの施設で受け入れが可能か把握したいという意見もあり、情報提供を行えるように HIV 感染症患者の受け入れが可能な施設についてデータを構築することを計画する。

#### **E. 結論**

千葉県内で医療・福祉・行政の関係者を対象に意

見交換会を開催し、69 名が参加した。また、そこからさらに地域の交流会につながり 46 名が参加した。HIV 感染の現状や最新の知識を得るために、意見交換会は有効であった。地域連携を進めるためには、研修会や拠点病院のバックアップ体制が必要だと感じている参加者が多かった。

#### **F. 健康危機管理**

本研究は介入研究ではなく特記すべき健康危険情報は無い。

#### **G. 研究発表**

- 1.論文発表 なし
- 2.学会発表

鈴木明子 他 地域で HIV 陽性者を支えるために実施した意見交換会の成果 第 33 回日本エイズ学会

#### **H. 知的財産権の出願・登録状況**

該当なし